
You know?

虹鮫連牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

You know?

【Nコード】

N4734Y

【作者名】

虹鯨連牙

【あらすじ】

大切な人の帰りを待っていた、一人の少女の物語。 この作品は、Arcadiaにも投稿しています。

あなたが私の隣からいなくなってから、一体どれだけの月日が過ぎていったのか。私はちゃんと数えています。

汗にまみれながら土を掘り起こした暑い日々も。

悴む手で古文書のページを捲ったあの日も。

日々の疲れを忘れた憩いの時も。

あなたはいませんでした。

いつになつたらあなたは戻ってくるのかと、それこそ歳の祝いを待ち焦がれる幼子おんなこのように指折り数えて待っていたのです。

そう、あなたとの再会を、私はずっとずっと望んでいました。

だから、こうしてあなたから帰郷の連絡を受けた時は、嬉しさのあまり胸が熱くなったものです。

そんな私の気持ちを、あなたには知ってほしい。

「姉さま、早く早く！」

慌しくも満面の笑みで私の手を引くのは、この間ようやく探索魔法の初歩を覚えたばかりの幼い妹。

「ねえ！ ちょっと待ってちょうだいったら！」

スカートの裾を踏みつけそうになりながら、私は妹の背中に向かって叫んだ。しかし、それでも妹は止まってくれない。

丈夫な皮製のブーツで小走り。髪は乱れていないかと気になって、何度も手櫛で梳いた。

「姉さまったら早くして！ ユーノが戻ってくるのよ！？」

「それは分かってます！」

急いだってユーノは逃げたりしないのに。

本当に？

いいえ、あの人はすぐにまた何処かへ行ってしまうかも知れない。そう思った私は、それ以上言葉を発しなかった。

昼間でも陽の光が届かないほど木々が生い茂る、深い森の中。凹凸と雑草と倒木に阻まれた、およそ道とは呼び難いような場所を、私と妹は慣れた動きで駆け抜けた。

とは言っても、普段は穿かないロングスカートが私の動きを邪魔してくる。

「姉さま、そんなの穿いてるから遅いんだよ！」

「べ、別にいいでしょ！？ たまには！」

「おめかししなくても、ユーノは普段の姉さまが好きだと思うよ？」
頬が赤く染まっていくのを感じながら、私は妹の言葉を振り切るように足を急かした。

やがて森が開け、薄暗かった視界に澄み渡る青空が飛び込んだ。周りには木々の代わりに、岩で造られた巨大建造物が立ち並んでいる。

周囲を取り囲む岩の建造物は、全てが過去の遺産。古より聳え立つ岩の城も、遺跡の中に眠っているであろう古代人の遺品も、そして周囲を囲う広大な森や雄大な空も、きつと昔のまま。

ここは、遺跡発掘をしながら流浪生活をする私達スクライアー族が、現在発掘作業を進めている場所なのだ。

その一角に、発掘道具を傍らにおいた一族の皆が集まっていた。

「おお、アイリとマリイが到着だ」

「遅いぞ二人とも」

皆の声がする方へ向かって、私は残り僅かな距離を全力で走った。しかし、皆が集まる輪に到着するよりも早く、私は足を止めた。理由は、その輪の中に彼の人影を見つけたから。

クリーム色のマントの下には、私達スクライアー族がよく着る服と同系統のデザインをあしらった民族衣装。色素の薄い髪をそよ風に遊ばせて、緑の瞳を携えて優しく微笑む顔。

そこにいるのは間違いなく。

「ユーノッ！」

「やあマリイ、久しぶりだね」

妹がユーノに飛びつくと、彼女の小さな体をユーノはしっかりと受け止めた。

少し離れたところで立ち尽くす私は、何だか急に恥ずかしくなつて俯き、右手で口元を押さえながら体を硬直させてしまった。加えて呼吸すら止めてしまう始末だ。

情けない。久しぶりに顔を見ただけで、私は一体何をしているのかしら。いいえ、何も出来なくなってしまうている。

そう思いながらも固まっていると、一族の皆が私を笑う声が聞こえた。恥ずかしがっているのがバレているみたい。余計に恥ずかしい。

そんな中、彼から声が届けられた。

「アイリも久しぶりだね。元気だった？」

「……………お、おかえりなさい」

「うん、ただいま」

変わらぬ声。

変わらぬ笑顔。

変わらぬ優しさ。

それらは、今度こそ離れてほしくはないもの。

今、私の目の前にいるのは、間違いなくユーノ・スクライアだった。

私達スクライア一族は、遺跡の発掘作業をしながら幾つもの次元世界を転々として暮らしている一族。

この流浪生活の起源は、一族の始祖であるスクライアが、全ての始まりとなった最初の次元世界の謎を紐解くために旅に出たことだと言われている。旅の途中で家族を築き、友を作り、弟子をとり。

そうやって長い年月の間に仲間の数を増やして、今に至るそうだ。

現在ではそんな先祖の伝統を守りつつも、外部からの依頼を兼ねた形での発掘作業を生業としていて、時には古代遺物と呼ばれる危険なものの搜索などにも協力しているのだ。

私達スクライア一族は、全員が家族。一族内の男と女から誕生した命や、流浪の途中で出会い私達と共に暮らすことを選んだ人は、皆スクライアの名を与えられる。

ユーノもそんな中の一人だ。私がユーノに出会ったのは赤ちゃんだった頃なので、彼がどうやって一族に加わったのかは分からないけれど、私とユーノはこのスクライア一族で、ずっと一緒に育ってきた。

隣にいて当たり前。お互いが離れ離れになることなんて考えたこともない。私にとってユーノは、弟のように世話を焼きたくて、兄のように信頼していて、父のように逞しさを感じていて。

そして。

「アイリ？ 僕の話、聞いてた？」

一生涯の絆で結ばれたいと願う人。

「ご、ごめんなさい……ぼーっとしていて」

だから、彼の話たことが信じられなかった。だから誤魔化した。

私の返事を聞いて、ユーノは「仕方ないな」と言いながら相変わらずの笑顔を浮かべていた。

誰よりも柔らかな笑顔。

「時空管理局の無限書庫で、司書をやろうと思っているんだって話だよ」

そんな笑顔が、もつとずっと遠くに行ってしまう話。

たくさんの料理と主役のユーノを囲い、私達は焚き火に当たりながら夜空の下で、再会した家族の話に耳を傾けている最中だった。彼の言葉を聞いて、私の頭は何もかもが真っ白になってしまった。

「ユーノは管理局に行っちゃうの？」

マリイの言葉を受け、ユーノは頷いた。

「うん。スクライア一族としての能力が活かせる仕事だし、実はすごく有益なことだと分かったからさ。頑張ってみようと思うんだ」

ユーノの管理局行きという志望を聞いて、一族の皆は寂しがりながらも笑顔で彼を応援した。その横ではマリイが駄々を捏ねる。

私だって寂しいし、もうどこにも行ってほしくない。せつかく帰ってきたのに、またどこかに行ってしまうなんて。

しかも、話を聞いた限りでは、彼はずっとその無限書庫と言う場所です仕事を続けるつもりみたいだ。

では、スクライア一族のことは？ 幼い頃からずっと一緒に暮らしてきた私達家族のことを、彼はなんとも思っていないのだろうか。私達一族の発掘作業には終わりなんてない。一つの現場が終われば次の世界が待っている。それなのに、彼は昔から続いてきた円環から抜け出ていこうと言うの？

私達と一緒に過ごした日々を捨て去ろうと言うの？

家族ってそういうもののなの？

いや、それより何より。

私の隣からまたいなくなってしまうの？

あまりにも衝撃的過ぎて固まっていると、一族の一人が私の肩を叩きながら言った。

「でも、それじゃあアイリだって寂しがらるだろう。ユーノ、しっかり挨拶をしておやり」

挨拶って、別れの挨拶のこと？

そんなもの要らない。私は、お別れなんてするつもりもないのに、何でそんなことをしなくちゃいけないの？

「アイリ、僕は」

「ユーノ……………挨拶は要りません」

そう、要らないんだ。

「え、でも」

「あなたが選んだ道ですもの。スクライア一族は皆が家族なのです

し、永遠のお別れというわけではないのですから。家族の新しい旅の門出を喜ばない者などいないでしょう？」

そう言った私の顔を見たユーノは、にっこりと微笑んで「ありがとう」と言った。

あなたが微笑んでお礼を言うということは、私は今、どんな顔をしているのでしょうか？

ねえユーノ、教えてくれませんか？

宴の席を離れ、私は遺跡の一角、岩の城の屋根に腰を下ろして夜空を見上げていた。赤紫色の空に浮かぶのは、大きさの違う親子月。風が涼しくて気持ちの良い夜。

私がここにいるのは、決していじけるためではない。そう、こんなに良い夜ですもの。自分の落ち込んだ感情でこの夜を汚すことはしたくない。

実はユーノに呼び出されたのだ。改まった様子で「少し話したい」と言うものだから、思わず誘いに乗ってしまった。

彼の言う話って、何かしら。

「お待たせ」

「あの、ユーノ……………話って？」

膝を抱えて座る私の背中に自分の背中を預け、ユーノは私と反対を向くようにして腰を降ろした。

背中を通じて伝わるユーノの鼓動はとても静かで、でも力強さを感じる。

まるで、何か大きな決意を秘めているかのよう。

「久しぶりに会ったわけだし、明日か明後日にでも管理局に戻る予定だから、ゆつくりと話がしたくて」

戻るって、あなたの戻るべき場所は“ここ”だったはずなのに。

「……………何を言っているんですか？別に、永久に会えないわけ

ではないでしょう？」

「それはそうだけど」

彼はそう言ってから、次の言葉を発しない。

そして、私からも言葉が出ない。

しばらくの沈黙が続いた。伝わってくるものはお互いの鼓動だけ。ユーノの鼓動はまるで変わらないまま、彼の笑顔みたいに優しく。

それに比べて私のものはどうだろうか。平静を装っているけれど、背中を合わせていては明らかに気付かれてしまうくらい胸が張り裂けそう。

私は自分の真下に魔法陣を開いた。それは桜色の、ミッドチルダ式円形魔法陣。

「アイリ？」

発動したのは探索魔法。私達スクライア一族が得意とするもので、探し物に便利な魔法。場所や物に残された思念の欠片や記憶の気配、それに文字などの確かな痕跡を辿ることが出来る魔法。発掘作業の際によく使うものだ。

だが、今の私は何かを探しているわけでもない。こうして意識を何かに集中させて気を紛らわせないと、本当に心臓が破けてしまいそうだったから。

いや、本当は探しているのかも。

管理局に行きたくない。発掘作業をしていきたい。司書なんてやりたくない。

私と一緒にいたい。

そんな気持ちがあるんじゃないかと、ゼロかも知れない可能性を信じている。

そんな気持ちを探しているのかも知れない。

「ユーノは、なぜ行こうと決めたのですか？」

探していた。“かもしれない”じゃない。

私は、確かに彼の中に可能性を求めていた。

「……………うん。実を言うと、無限書庫の司書という仕事にやりがいを見つけた、かな」

「それは、あなた以外に適任がないからという意味で？」

「まあ、僕的能力を必要としてくれたつても理由の一つだけど」
「それだけじゃ、ないんだ。」

「スクライアを離れてから出会った人、友達の力になりたいって気持ちもある」

「その人って？」

「とても真っ直ぐで、優しくて、時々無理をするから心配してしまうこともあるけれど、とても強いんだ。ジュエルシードを探しに行った時に会って、それからしばらく一緒にいたけれど、僕はこれからその人のために何かをしてあげたいんだ。無限書庫の司書だって、その人の今後に役立てると思ったから引き受けた」

「どうやらその人は、ユーノにとって大切な人みたい。」

「でもユーノ。あなたは知っている？」

「自分で言うのも恥ずかしいけれど、私だって真っ直ぐな人でしょう？」

「私だって優しいでしょう？」

「私だって寂しいのに、無理して一生懸命堪えているでしょう？」

「私とその人は、一体何が違うの？」

「私にその話をするために、ここへ呼んだのですか？」

「そう言うと、ユーノは自分の真下に、緑色の魔法陣を展開した。」

「私同様、彼もまた円形のミッドチルダ式。」

「どうしたのですか？」

「君こそ、どうしてさっきから魔法を？」

「わ、私はただ……………その……………探しものを」

「嘘ではない。私は探し求めている。」

「あなたの中にあるかも知れない、私への想いを。」

「僕も、実は探しものを」

「何を探しているの？」

「……………君の気持ち」

桜色と緑色の円が触れ合い、重なり合い、私達は今、互いの気持ちを探り合っているみたい。

それは一体どういうことかなんて、聞かなくても解ってしまった。ねえユーノ、あなたは知っている？

私が一体どんな想いを抱いているのか。あなたには伝わっているの？

「僕は、君の好意に気付いているつもりだ」

「……………自惚れだわ」

「本当に？ でも、聞いてほしい」

背中合わせでよかった。顔を合わせていなくてよかった。

堪えきれない感情が目から零れ落ちている姿を、彼に見られたくない。

私は、あなたが大切に想うその人に負けなくらい、強い人でいたいから。

「僕は、君の気持ちに気が付いていながら、君の期待に応えられないことを伝えようとしているんだ。そして、それがとても残酷なことでだと自覚している」

ユーノ、あなたは知っている？

私はとても悔しい。

私は、あなたが大切に想うその人に負けたみたいで、胸がとても苦しい。

「それに僕はずるい。こうして魔法でも使って気を紛らわせないと、君にこんな話をする勇氣さえ出てこない」

「……………探しものって言うのは、嘘ですか？」

私だって酷い女。自分も彼と全く同じはずなのに、彼一人を責めているみたい。

声は震えていた。鼻をすする音も聞こえただろう。膝の上の雪は、すぐに拭きとった。

でもユーノ、あなたは知っている？

私には今、嬉しい気持ちもあるんですよ。
あなたが私の気持ちを知ってくれたこと。

そしてその気持ちを放置することなく、きつちりと終わらせようと勇気を振り絞ってくれていること。

「……………今の君が、僕をどう想っているのか。その気持ちを探しているのかも……………こんな僕だ。いつそのこと君にはめいっぱい嫌われたほうがいいのかも知れない」

本当に、ずるい人。

そんな気持ちなんて、見つかるわけないのに。

私は、あなたのことを嫌いになんてなれないのに。

そしてようやく分かった。

私の探しのものも、見つからないんだってことが。

「ねえユーノ……………」

私は後ろを振り向いた。

そして彼もまた、同時に振り向いた。

ねえ、知っている？

私は優しいし、強い人。

あなたが大切に想う人と何も変わらない。

「アイリ？」

「……………いつてらっしゃい」

微笑んだ。

彼の決意を、私は受け入れることにした。

大好きなあなたが選んだ道だから。

後悔の無いように歩んでほしい。

だから、私はあなたとの別れを決意した。

あなたが私の隣からいなくなってから、一体どれだけの月日が過ぎていったのか。私はちゃんと数えています。

汗にまみれながら一生懸命仕事をしていても。

悴む手で古文書の解読をしていても。

日々遺跡の上で親子月を見上げていても。

あなたはもういません。

いつまでもくよくよしていられないと、それこそあなたの大切な人よりも強くなれるようにと、胸を張って過ごしています。

そう、あなたと再会した時は、あなたが驚くような人になることを目指しています。

だけど、いつかあなたから帰郷の連絡があるかもと、こっそりと胸に秘めていることも事実です。

そんな私の気持ち、あなたは知っていますか？

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4734y/>

You know?

2011年11月13日03時11分発行